

「比較思想の新段階——人間・科学・宗教——」へのコメント

坂部 恵

1

三人の提題者のかたがたの御報告は、それぞれに、かならずしも意識的にそうしたというのではなくとも、十五年前、二十年前の比較思想とそれを取り巻く学問状況とひきくらべてみるとき、おのずから、今日の研究状況ないし研究の趨勢のいくつかの局面をあらわすものとなっている。

わたくしは、西洋哲学を専攻しているものであるので、関心がとかく西洋を中心とする学問の研究状況に偏るといふ〈偏向〉をまぬかれえないが、そのことをお許し願った上で、とりわけ七〇年代半ばないし八〇年代以降の時代の哲学・思想界全般の大勢の変化を考慮に入れつつ、それとの連関で「比較思想の新段階」のありかたについて若干のコメントを提示すべくこころみてみたい。

2

考察の手がかりとして、昨一九八九年の八月の前半に二週間にわたってハワイ大学のイースト・ウエスト・センター主催で開催された、わたくし自身も参加した第六回「東西哲学者会議」のことに ついて述べてみたい。

一九三九年以来の長い歴史をもち、世界各地から四〇〇人あまりの参加者を集めたこの伝統ある会議で、わたくしにとりわけ印象深かったことは、第一に、マッキンタイア、バーンスタイン、ダントーといったアメリカ哲学会の歴代会長をはじめ、パットナム、ローティら現代のアメリカ哲学を代表する学者たちが多く参加し、東洋の哲学やまた比較哲学の問題について、なみなみならぬ関心と興味を示していたこと、第二に、「文化と近代性

——過去の権威」という総題のもとに、会議全体のフレームワークの立案と運営にあたったのが、科学史の研究者として著名な地元ハワイ大学のラリー・ローダンを中心とし、おなじハワイ大学のロジャー・エイムス（中国哲学）、ハーヴァードのトゥ・ウェイ・ミン（中国哲学）ら四十代の研究者たちを主とするチームであり、そのことを通してあらたな思想研究の動向の出現とそれにともなつての若い研究者の台頭を印象づけたことであつた。

右の第二の点にとりわけ関連して、もうすこしくわしくこの会議に示された現在の思想研究、さらには比較思想研究の状況についていうと、それは、さしあたり、以下の三点に要約することができる。

①科学史の領域での、トマス・クーンの『科学革命の構造』（一九六〇年）の登場に象徴される六〇年代以降のいわゆるパラダイム相対主義の風潮とそれをめぐる活発な議論の展開は、啓蒙主義のかたの単線的進歩史観や科学の進展を単純に知識の蓄積と見る考えの有効性を根本から疑問にさらすこととなつた。ヨーロッパでは、フーコーの思想史研究がおなじく単線的進歩史観の有効性を問うにあつて一定の衝撃力をもつた。くわえて、おなじくこの時期にひろく影響をもつにいたつた日常言語学派や生成文法をはじめとする言語学のあらたな動向などが、西欧語やしたがつてまた西洋思想の特権視の牙城をくずすにあつてある役割を果たす。

しかし、七〇年代、八〇年代においては、こうした一連の動きの一方である形で先鋭化とならんで、他方でまたその行き過ぎにたいする修正と流動化の動きがおこってくる。すなわち、後者の動向に関していえば、言語相対論、またそこにすくなくとも潜在的に含まれるノミナリズムへの傾斜からゆるやかなリアリズムへ、共約不可能性や翻訳の不確定性から異文化の理解可能性や異集団間のコミュニケーションの問題へ、日常言語の特権視から過去の思想体系からいわゆる人工言語までも含めた人間の言語表現一般と現実のかかわりのよりひろい視野における検討へ、といった一連の力点の移動が生じてくる。

②以上のとりわけ八〇年代に顕著となる一連のあらたな動向、とりわけ、科学史研究の領域でのパラダイム相対主義の修正と流動化の動向をふまえながら、それをいわば歴史的時間の領域から地理的空間的領域に移し変えて、東西の比較思想、異文化理解の問題へへの適用をこころみたのが、前述のラリー・ローダンによる今回の会議の全体の問題枠の設定であつた。

③こうして設定された全体の問題枠にそくして、会議では、活発かつきわめて精緻な議論が戦わされたのであるが、そこでは、おのずから、八〇年代を特徴づけるつぎのふたつの動向が顕著に浮かび上がってくる。

(a)普遍的なもの、とりわけ普遍的な価値を先取りすることに批判的で、むしろ、マッキンタイアの“After Virtue—A Study in

Moral Theory" (1981) における習慣や伝統を勘案しつつアリストテレスのフロネーシスの考えの復権をはかるものから、さらにラディカルにローティの "Philosophy and Mirror of Nature" (1979) における百家争鳴そのものを是とする、ほとんど価値のアナーキズムというに近い、一面で多民族国家であるアメリカの伝統に即した、価値・文化の多元論にまでおよぶ一連の動向。

(b) かつてのローティをもスポークスマンのひとりとしてもった、哲学上のリングイスティック・ターンに代わって、むしろリアリスティック・ターンというべき方向を顕著に体现するバットナムらに代表され、言語と現実、人間と自然、精神と身体等々に断絶よりはむしろ連続の様相を見届けるピースの連続主義 (Synecism) を復権しつつあらたなリアリズムすなわち実在論を志向する一連の動向。

3

以上のとりわけ③で指摘した、(価値) 多元論、シネキズム (連続主義) というときに対立し、ときにあい補いつつ展開される七〇年代のおわりから八〇年代における諸動向の基盤の上に、「科学・宗教・人間」について三人のかたがたの報告をあらためて位置づけてみると、「比較思想の新段階」のありようがおのずから見えてくる。いくつかの目立ちやすい要点を整理してみると、以下のとおりである。

① 東西思想の断絶や差異・異質性をいうよりもその連続、とりわけ東西の宗教の対話の可能性をいう、いわば東西思想のシネキズム (連続主義)、東西宗教のシネキズムへのあらたな展望。たとえば、今年 (一九九〇年) 年頭の朝日新聞紙上の梅原猛氏との対談で中村元氏が紹介しておられる現今のアメリカでの、定冠詞も不定冠詞もつかない端的なヘレリジョンへの関心の高まり、あるいは、また、ピーター・バーガーが "The Heretical Imperative—Contemporary Possibilities of Religious Affirmation" (1979) (邦訳名『異端の時代』園田、金井訳、新曜社) で説くエルサレムとベナレスの対話の可能性などを見ると、百年ほど前にラーマクリシュナ・ミッシェンのヴィーヴェーカナンダがアメリカ社会に一定のインパクトをあたえた頃から時代がまたひとめぐりして、あらたな諸宗教の対話と融合の時代が来たという印象を禁じえない。

② 心身のシネキズムへのあらたな展望。これは、とりわけ、湯浅氏の報告にはつきりと提示されているものだが、ほかならぬ湯浅氏の『身体論』の英語版のアメリカでの評判などが、この問題をめぐってもあらたな東西対話の可能性があることをはっきりと示している。あるいは、これに、人間と自然環境のシネキズムへの展望を、近來のエコロジー問題への関心の高まりなどと関連して付け加えておいてよいかもしれない。

③ 科学と宗教のシネキズムへの展望。針生氏と矢野氏の報告に

あきらかなように、西洋近代科学を科学のありうる唯一のモデルとする考えは、パラダイム論や構造主義など西洋の内側からの近年のその相対化のころみをいま仮に度外視して、中国、インド等、非西洋圏の科学の思考体系の多元性や複数性にたいしてきわめて寛容な体質をもつ伝統を顧慮することのみによっても、今日維持しえないことはあきらかであるといつてよい。すくなくともある種の非西洋科学が、宗教と不可分の関係にあり、むしろ宗教を母体として生まれたものであることは、矢野氏の報告の明示するところである。

④自然科学——人文・社会科学のシネキズムへの展望。自然科学は法則定立的、人文科学は個性記述的とする新カント学派以来の学問論は、今日もはや時代おくれである。一九六〇年代以降のガダマー、フォン・ウリクト、ウインチ、ダントーラの人文・社会科学のあらたな基礎の探求の仕事は、一面で、二〇年代、三〇年代このかたの実存主義、弁証法神学等の反科学主義、反合理主義の行き過ぎの修正という意味あいをもつとともに、他面で、ヘルダー、(シユライエルマッヘル、フンボルト)、ランケ、ブルクハルトといったひとびとの、平板な啓蒙的普遍主義に反対する歴史主義を承けたトレルチの「現在の文化綜合」(Gegenwärtige Kulturkritik)の構想のあらたな復権のころみという意味あいをもつとわたくしは考える。ともあれ、ここで、自然科学に関する見方の変化とあわせて、サイエンスよりは、むしろ、フマニス

ムスの流れを汲む(アート)としての人文・社会科学、また自然科学という展望が可能になってくるだろう。

(さかべ・めぐみ、西欧近世哲学、東京大学教授)